本扉

今につながる妻沼の歴史

埼北文化研究会

まつやま書房

148x210 A5

刊行によせて

『今につながる妻沼の歴史』を読むと、妻沼地域が描かれているそれぞれの時代の情景、賑わい、雰囲気、庶民の暮らしや笑顔に思いを馳せることができる。

当地に生まれ育った者から見ても、ここに記載されている一つ一つの内容が初めて知る事実だったり、昔の記憶をたどりながら納得したりと、改めて新鮮な気持ちになる。

例えば、平家物語から見た実盛公は、武勇に優れていただけでなく義理人情に厚い東国武士の代表であったのがよく理解できた。

大正期における聖天様の節分会には、地元以外にも様々な人々が各地から参加していたのに心惹かれ、絵はがきから見える身近な場所の変容は、今につながるしきたりを伝えている。

幕府公認の舟渡場であった葛和田河岸の繁栄は、「あばれ神輿」祭礼に名残をとどめていたり、明治の利根川大水害を契機に、妻沼地域が大変貌を遂げるのも先人の奮闘のおかげであったと知った。

また、明治初頭に開催された句会から、雑排が地域文化の娯楽として大衆に親しまれていたのに感心したりと、今までに気づき得なかった新たな事実にも接することができた。

子供の頃より見慣れた出来事や行事も、時代と共に消えたり、形を変えて継続してきた様子が手に取るように分かるので、興味をそそられる。

何気ない日常も歴史を紐解くと、少しずつ変化を繰り返しており、時を区切って俯瞰してみると大きく様変わりしていることに気がつく。

一〇〇年単位でそれぞれの時代を知り、悠久の時を経て今があると想像したら、田舎で何も無いと思っていた妻沼がなぜか誇らしく、愛着を感じるようになる。

目まぐるしい社会の中で、我々が心豊かに暮らしていくには、生活の拠点である故郷の歴史や文化を学び、先人の残してくれた遺産を大切にし、それらを後世に伝えていくことが求められるだろう。

今後も、多くの人々が地元に関心を持ち、守るべき伝統と時代に合った移り変わりを見極めながら、新たな妻沼の発展につながるまちづくりをしていただけることを願っている。

そして、それらのことが長い年月をかけて故郷の風土を築いてくれた先人に対する恩返しではないかと思う。

本書の刊行にあたり、各方面から歴史を掘り起こしながら、時代の息吹や人々の活躍に光を当てていただき、妻沼の魅力を再確認するきっかけを与えて下さった先生方に、心より感謝を申し上げます。

まろく会代表　岡田　仁一

まえがき

本書がテーマとしている妻沼は、熊谷市北部を占める地域です。

江戸時代の妻沼村は、武蔵国幡羅郡に属し、目沼・女沼とも表記されました。近隣には男沼という場所もありますから、東山道武蔵路の渡し場近辺にあった二つの沼を男沼・女沼と名付けたのが、地名の由来とされています。

妻沼村は、大正二年（一九一三）に弥藤吾村と合併し妻沼町となり、昭和三〇年（一九五五）に秦村・長井村・男沼村・太田村と合併して新たな町として成立しました。現在、住所地名としての妻沼は聖天山辺りだけを示すものになっていますが、妻沼地域というときには、熊谷市と合併する前の旧妻沼町の範囲を指すことが一般的です。合併から一五年以上が経っても、共通の文化を持つ地域としてまとまりを維持しています。

妻沼の中心となっているのが、妻沼聖天山です。源平合戦で活躍した斎藤実盛が信仰した歓喜天の像を祀ったのを創始とします。歓喜天の姿は、象頭人身の単身像と二尊が抱き合う双身像があり、縁結びの天部とされます。実盛は越前出身の武将で、長井庄の管理者として、妻沼の地にやってきました。それから八〇〇年以上経っても、実盛が作った聖天山は地域の核となっています。歓喜天を祀る以前からも、伊弉諾（イザナギ）・伊弉冉（イザナミ）が祀られていたと言われており、この地には、昔から人と人とを結びつける力があったようです。

聖天山は、戦国時代には忍城の成田氏の庇護を受け、江戸時代にも幕府から五〇石の朱印状を受

けています。武蔵国と上野国の境である利根川の渡河地点となっていたのが、妻沼が繁栄した理由です。しかし、利根川は暴れ川でもありました。実際、江戸時代の寛保二年（一七四二）の大水は、未曽有の被害をもたらし、全国の大名による御手伝い普請によって被災地復旧が図られています。この洪水の前後に建てられたのが、国宝となっている歓喜院聖天堂です。日光東照宮の系譜をひく職人たちによる豪奢な建築物は、幕府や藩といった権力者ではなく、庶民らが中心となって浄財を集めて費用が賄われたことでも、評価されています。

建築に限らず、全体的な文化レベルが高い地域で、句会・書画会などが江戸時代から頻繁に催されてきました。筆禍で江戸から追放された文人・寺門静軒が、身を寄せたのもこの地でした。静軒が、妻沼にやってきたのは、自分と会話レベルが合う学識者が鄙ながらも多くいたからでしょう。静軒は、妻沼に七年間滞在しており、その間に書いた作品が文化財に指定されて地域に残されています。

このような文化の高さは、現在も引き継がれていると思っています。本書の執筆者は妻沼にゆかりがある人に集まってもらいました。「刊行によせて」「聖天様の門前から」を執筆した岡田仁一さんと高柳紀子さんは、妻沼で生活している人です。地域の人に支えられて本書ができたという経緯を表現するため、論考を挟む形でお二人に文章を寄せてもらっています。

それぞれの論考について内容を紹介しておきましょう。

蛭間健悟「平家物語「実盛」の段を考える」

斎藤別当実盛は、平家物語のエピソードで、全国的に名前の知られた武将です。しかし、知名度に比して、実盛の歴史的な実態はほとんど取り上げられてきませんでした。それについて考察したのが本稿です。

栗原健一「大正期における妻沼聖天山の節分会」

妻沼聖天山は、年間を通して多くの行事があり、大勢の信者や観光客を集めています。その内の一つ、節分会の実態を当時の資料を使って明らかにしています。現在とは少し違う大正時代の節分会の様子を知ることができます。

森田安彦「妻沼地域の絵はがき」

観光地でもある妻沼では、昔から風景絵葉書が作られてきました。絵葉書は一種のメディアであり、現地の様子を遠方に知らせる機能を持っていました。本稿では、絵葉書に映っているものを解説することで、古い妻沼の情景を現在に蘇らせています。

仲泉剛「葛和田の繁栄　～葛和田河岸の復元的考察～」

葛和田河岸は、妻沼村よりも下流に位置しています。鉄道ができる前までは、繁華な場所として栄えていました。地域に残された古地図を元に、葛和田にどんな人が住んでいたのか、どんな場所

だったのかを明らかにしました。

矢嶋正幸「明治四三年の大水害による妻沼の大変貌　～災害伝承碑から見る～」

近代以降最大ともいわれる明治四三年（一九一〇）の大水害は、妻沼地域にも大きな被害をもたらしました。妻沼地域には、災害の様子を伝える災害伝承碑がいくつも立っています。災害伝承碑を元に、被災地がどのように復興していったのかを見ていきます。

黛千羽鶴・矢嶋正幸「雑俳から見る妻沼低地の民俗と在村文化」

江戸時代から明治時代にかけて、妻沼地域の農村では頻繁に句会がおこなわれていました。明治八年（一八七五）の『妻沼歓喜天奉額』に記された雑俳をもとに、当時の年中行事や生活の様子を復元していきます。

どの論考も地域に根差した深い洞察に支えられたものになっています。妻沼には目で見て楽しめる建築物や行事などがあって、埼玉県を代表する観光スポットとなっています。しかし、本書を読んでからまた妻沼を歩いてみると、それまで見過ごしてきた地域の魅力にきっと気が付いて、妻沼がもっと好きになるはずです。本書が、読者の皆さんが妻沼の魅力を発見し、楽しむための一冊となることを願っています。

埼北文化研究会代表　矢嶋　正幸

『今につながる妻沼の歴史』――目次

刊行によせて　1 …… 岡田 仁一
まえがき　3 …… 矢嶋 正幸

第一章　平家物語「実盛」の段を考える …… **蛭間 健悟**
はじめに　12
一　史実の実盛と創られた実盛　12
二　『平家物語』と実盛　16
三　平家物語「実盛」の段を読む　21
四　実盛の装束を考える　27
五　史実の実盛を考える　30
おわりに　36
参考引用文献　38

第二章　大正期における妻沼聖天山の節分会 …… **栗原 健一**
はじめに　42
一　妻沼聖天山の概要　43
二　節分会への参加 ― 飯塚岱蔵の場合　48
三　節分講という組織 ― 青木清太郎の場合　53
四　会計簿からみた節分会　55

おわりに　60
参考引用文献　62

第三章　妻沼地域の絵はがき……森田 安彦
はじめに　64
一　絵はがきの持つ意味　65
二　絵はがきのはじまり　66
三　絵はがきの仕様　67
四　妻沼地域の絵はがきの概要　68
五　妻沼地域の絵はがき　70
おわりに　115
参考引用文献　116

第四章　葛和田の繁栄　～葛和田河岸の復元的考察～……仲泉 剛
はじめに　120
一　葛和田の繁栄　121
二　葛和田河岸の景観を復元する　127
まとめにかえて　134
参考引用文献　139

第五章　明治四三年の大水害による妻沼の大変貌　～災害伝承碑から見る～…矢嶋 正幸
はじめに　146
一　妻沼の地形的特徴　149
二　明治以降の地域住民の動き　150
三　明治四三年の災害について　152
四　復興の様子　157
おわりに　166
参考引用文献　167

第六章　雑排から見る妻沼低地の民俗と在村文化……黛 千羽鶴・矢嶋 正幸
一　『妻沼歓喜天奉額』について　172
二　本稿の目的　173
三　民俗の諸相　175
おわりに　193
参考引用文献　195

「the love」～今につながる妻沼～　197…カシワギ バーズ ヒロアキ
令和の貴惣門　199
聖天さまの門前から　200…高柳 紀子

あとがき　208……矢嶋 正幸

第一章　平家物語「実盛」の段を考える

蛭間　健悟

はじめに

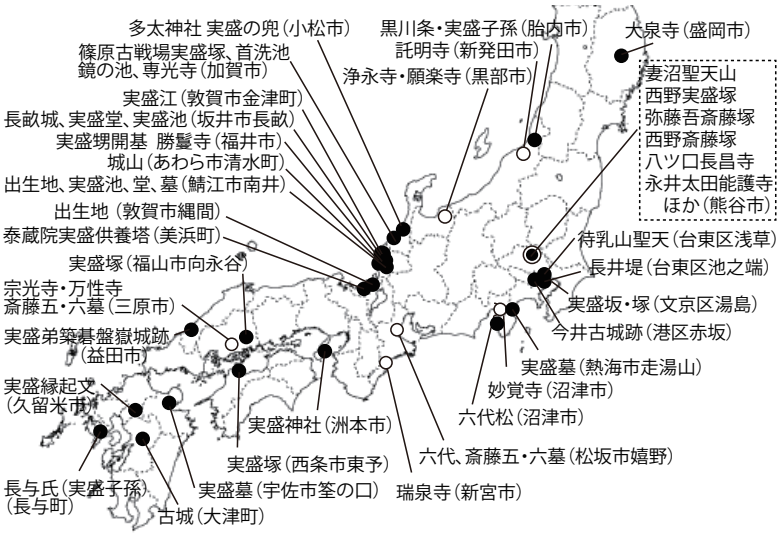
妻沼の聖天さまを開いた「実盛公」―妻沼の人々にとって、平安時代末期の武将斎藤実盛は、現在でも尊敬され、親しまれる存在だ。この本のタイトルどおり、妻沼の人々の実盛への想いは、八〇〇年を越えて「今につながる」ものといえよう。

しかし、今に残る実盛の伝承は、そのほとんどが「史実」（実際にあったこと、起こったこと）ではない。その没後から現代までの長い年月に新たに創作されたものだ。この本の他のテーマは、江戸～昭和時代のもので、現在でも史実を語る多くの歴史資料が残る。しかし、八〇〇年以上も経過した実盛生存時の史実を語るものは、残念ながらほとんど残されていない。ここでは、限られた歴史資料から、生前の実盛について考えてみたい。

一　史実の実盛と創られた実盛

1　全国に残る実盛の伝承

図1は、日本全国に残る実盛とその子供たちにかかわる史跡である。この図に記したのは、たまたま見つけることができたものだけで、実際にはもっと多くあるはずだ。実盛の本拠地があった妻沼周辺と生地である福井県に多いが、全国に万遍なく広がっている。実盛やその子供たちが、全国



【図 1】全国に残る斎藤実盛父子の史跡等

区で知られていることが分かる。

実盛の子、斎藤五・斎藤六兄弟についての史跡も多い。この兄弟は、『平家物語』で、平家最期の嫡流（ちゃくりゅう）（実際は違う）平六代（たいらのろくだい）に仕える若武者として、多くの場面に登場する。この六代を弔って斎藤五・六兄弟が創建に関わったとするお寺や史跡も多い。

しかし、こうした史跡・伝承から、実盛やその子供たちの史実を考えることは難しい。なぜなら、これらの多くが、実盛没後（しかも、その多くが江戸時代以降）に新たに創出されたものだからだ。もちろん、これらの史跡・伝承は、実盛がその地域で受け入れられ、長く人々に継承されてきたことを証明する重要な歴史資料だ。ただ、生前の実盛の足跡を考える上では、そのまま参考とすることは難しい。

2　実盛の史実を語る資料

では、実盛の史実を探るには、どのような歴史資料を見ればよいだろうか。

一番頼りになりそうな資料は、実盛が生きた同時代に作成されたもので、手紙や裁判の書類、日記といったものだ。しかし、実盛が書いたものも、実盛あてに書かれたものも、一つとして残っていない。文中に、実盛が出てくることさえない。

次に参考になりそうなのは、没後あまり時を置かずに作成された編集物だ。これについては、鎌倉幕府の公式記録集である『吾妻鏡』に実盛が二か所だけ出てくるが、どちらもわずか数行の断片的な記事だ（1）。『吾妻鏡』は、北条氏が実権を握った時代に編集されたため、当然、北条氏が良く書かれる。源平合戦で、その敵方（平家方）だった実盛は、たいして取り上げられなかった。

【図 2】　斎藤実盛銅像（妻沼聖天山）

ほかには、実盛没後からあまり時をかけないで作成された文芸作品がある。ただし、文芸作品でも、室町時代に作られた能や江戸時代の歌舞伎の演目では、実盛の時代から数百年も時が経ってから創作されているので、史実を考えることは難しい。実盛の没後からあまり時を経ずに、その原型が作られた作品が必要となる。これについては、実盛は、この時代の武将としては豊富に資料が残っている。源平合戦を扱った『平家物語』や、保元の乱・平治の乱を扱った『保元物語』・『平治物語』などだ。

第二章　大正期における妻沼聖天山の節分会

栗原　健一

はじめに

毎年二月三日は、節分である。節分といえば豆まきであるが、近年では、「恵方巻」と呼ばれる太巻きも流行している。太巻きは、恵方（吉をもたらすとされる方角で、干支によって毎年異なる）を向いて切らずにそのまま食べると、一年にわたり健康で過ごせ、願いが叶うとされる。大阪では、昭和一五年（一九四〇）には巻き寿司の売られていたことが確認されており、平成に入ってコンビニエンス・ストアにて販売され、全国化したという（小川直之二〇一八）。

そもそも節分とは何か。季節の変わり目を指し、立春・立夏・立秋・立冬の前日のことであるが、中でも立春の前日が重要視された。古代の朝廷儀式から鬼の追い祓いが行なわれ、室町時代からは豆まきなどもなされてきた（阿部泉二〇二二）。

江戸および近郊の年中行事についてまとめた斎藤月岑編『東都歳時記』でも、立春の前日として節分が紹介されているが、江戸時代は旧暦であったので、一二月の項に記されている。その説明をみてみよう（朝倉治彦校注一九七二）。

【史料1】『東都歳時記』一二月

○今夜尊卑の家にて熬豆（いりまめ）を散（うち）、大戟鰯（ひひらぎ）の頭を戸外に挿（さ）す。豆をまく男を年をとこといふ。今夜の豆を貯へて、初雷の日、合家是を服してまじなひとす。又今夜いり豆を己か年の員に一ツ多く数へて是を服す。世俗今夜を年越といふ。

これによると、各家では煎った豆をまき、ヒイラギに鰯の頭をつけて屋外に挿した。また豆をまく男を年男といった。この夜には、煎り豆を自分の年齢より一つ多く食べ、この夜を年越しといったとしている。旧暦では、一年の終わりの日が節分だったのである。現在の二月三日とは日程が異なっていた。この説明の後に『東都歳時記』では、亀戸天満宮追儺（ついな）の神事、雑司ヶ谷鬼子母神堂追儺（おにやらい）、浅草寺観音節分会などが紹介されている。

このような節分について、妻沼聖天山では、現代でも年中行事の一つとして盛大に行なわれている（コロナ禍では中止された）。しかしながら、妻沼聖天山の節分会については、歴史的な検討はあまりされてこなかったように思われる。そこで本稿では、「今につながる妻沼の歴史」として、妻沼聖天山の節分会について二つの視点から歴史的にその様相を明らかにしたい。二つの視点とは、すなわち参加者からの視点と運営者からの視点である。なお、検討する時代としては、比較的史料のまとまって遺されている大正期を中心にみていきたい。

一　妻沼聖天山の概要

1　国宝　歓喜院聖天堂

妻沼聖天山は、歓喜院の寺伝によると、治承三年（一一七九）に斎藤実盛の守り本尊の大聖歓喜天を祀って長井荘の総鎮守としたことにはじまるとされる（熊谷市教育委員会編二〇一六）。聖天堂は、

火事などの被害で何度か再建されてきたとされるが、現在の建物は宝暦一〇年（一七六〇）に完成したものである。大工棟梁は林兵庫正清で、再建を企画して職人たちを集め、集金まで行なった。工事は、寛保の大水害などにより中断を余儀なくされ、大工棟梁の正清も死去し、子の正信が大工棟梁を引き継いで、色鮮やかな彫刻で埋めつくされた壮麗な建物を完成させた。工事開始から二五年後のことである。聖天堂は、榛名神社社殿（現、群馬県高崎市）など、後の北関東の建築へ大きな影響を与えたとされる。また、この建物は妻沼地域を中心とした庶民たちの出金に拠ったものであったことに特徴がある。

この歓喜院聖天堂は、修復工事を経て平成二四年（二〇一二）に国宝指定された。享保二〇年（一七三五）から宝暦一〇年（一七六〇）にかけて林兵庫正清・正信らによって建立され、彫刻技術の高さや漆の使い分けなどの高度な技術から、近世装飾建築の頂点をなす建物と評価されている。また民衆の力によって成し遂げられた点からも、文化史上高い価値を有するものとされている。「江戸時代建築の分水嶺」ともいわれ、江戸後期装飾建築の代表例とされている。歓喜院聖天堂の国宝指定は、建造物としては埼玉県初の国宝で、熊谷市としては初の国宝指定であった。

この他、妻沼聖天山の建築には、国重要文化財の貴惣門がある。嘉永四年（一八五一）に林正清の子孫である林正道によって完成され、全国に四例しかない特殊な屋根の形（三つ重なる破風）をもった建築である。門には、熊谷市指定文化財の中門（江戸時代初期の建築）、仁王門（明治二七年〈一八九四〉再建）があり、仁王門の仁王像からは万治元年（一六五八）の胎内札が確認されている。他にも、五社大明神（天明三年〈一七八三〉の竣工）、天神社（天明五年〈一七八五〉の竣工）、荒神社（天明七年

〈一七八七〉の竣工)、閼伽井堂(江戸時代後期の建築カ)、籠堂(明治一二年〈一八七九〉の竣工)、鐘楼(宝暦一一年〈一七六一〉竣工)など、数々の名建築が伝存している。

また、建築以外にも妻沼聖天山には多くの文化財がある。秘伝本尊錫杖頭(国指定重要文化財)、「紵絲斗帳」(埼玉県指定有形文化財)、暦応二年(一三三九)の「鋳銅製鰐口」(埼玉県指定有形文化財)、永禄八年(一五六五)の銅製仏供杯、寺門静軒筆「妻沼八景の詩画幅」(熊谷市指定文化財)などが挙げられる。

2　妻沼聖天山の年中行事

ここで、妻沼聖天山における現代の年中行事について、概観しておこう(熊谷市教育委員会編二〇一四)。

〔一月〕元旦　初詣
～七日　新年特別祈祷
一八日　聖天様の初縁日
〔二月〕三日　節分(年男豆まき)
一五日　涅槃会
〔三月〕第二土・日曜　浴油万人講
一八～二四日　春彼岸
二一日　正御影供
〔四月〕一八～一九日　春季大縁日(聖天山の春祭り)

二四日　摩多利神社春季祭礼
〔五月〕八日　花まつり
二一日　実盛忌法要
〔七月〕二〇～二六日　土用特別祈祷
〔八月〕一三～一六日　お盆（盂蘭盆会）
〔九月〕二〇～二六日　秋彼岸
〔一〇月〕一八～一九日　秋季大縁日（聖天山の秋祭り）
二四日　摩多利神社秋季祭礼
〔一一月〕一五日　七五三祈願祭
〔一二月〕八日　成道会
二二日　星祭厄除祈願祭
大晦日　除夜の鐘

妻沼聖天山では、元旦の初詣にはじまり、大晦日の除夜の鐘まで、毎月のように行事があることを確認できる。節分は、毎年二月三日に行なわれ、篤信者（信仰のあつい人）や講中有志の者たちが年男として奉仕をし、参詣者へは豆まきが行なわれている（【写真1】）。

また、妻沼の住民への聞き取り調査では、節分について次のような内容が紹介されている（熊谷市教育委員会編二〇一四）。

＊煎った豆を一升桝に入れ、家の戸障子を開け放し、神棚、仏様、床の間、お勝手、便所などに、

【写真 1】現代の妻沼聖天山節分会（熊谷市教育委員会編 2014）

大声で「福は内、鬼は外」といい、豆をまく。外へ出て、ウジガミサマ、クルワの稲荷様、聖天様、大我井神社に行き、豆まきをする。残った豆は福茶としてのみ、残りを保存しておき、初雷の時に雷除けとして食べる（妻沼池ノ上）。

＊聖天様の五人講で順番に代参し、お札と福豆を請けてきて分配する（妻沼上町）。

＊聖天様の節分講に参り、お札と福豆をいただき神棚に供える。焼いたイワシの頭をヒイラギの枝に挿し玄関脇にとりつける。夜、福豆で豆まきをする。家族は自分の年だけ豆を食べ、豆の入った福茶をいただく（妻沼仲町）。

このように、妻沼の住民たちにとって、節分という行事は、いくつかのかたちがみられるが、妻沼聖天山とは切っても切れない関係にあるといえよう。

それでは、大正期における妻沼聖天山の節分会はどのようであったか、具体的にみていきたい。

各著者紹介

【編著者略歴】
矢嶋　正幸（やじま　まさゆき）
一九八二年生まれ。埼北文化研究会代表。専攻は、民俗芸能論・宗教民俗学。主な論文に「唯一神道化する神楽についての一考察」『民俗芸能研究六四』などがある。

【著者略歴】
蛭間　健悟（ひるま　けんご）
一九七四年生まれ。熊谷市教育委員会市史編さん室勤務。日本中世史、熊谷の郷土史。共著に『熊谷市史』通史編上巻、『熊谷市史調査報告書』荻野吟子－その歩みと出会い－。

栗原　健一（くりばら　けんいち）
一九七一年生まれ。立正大学文学部専任講師。熊谷市史編集委員（近世専門部会専門調査員）。

森田　安彦（もりた　やすひこ）
一九六二年生まれ。熊谷市立江南文化財センター勤務。専攻は考古学。絵葉書を趣味で集める。主な論文に「唐獅子牡丹文系茶磨の系譜」『埼玉考古第 54 号』などがある。

仲泉　剛（なかいずみ　つよし）
一九九三年生まれ。日本近世史専攻。立正大学大学院博士後期課程修了。公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団横浜市歴史博物館学芸員。徳川林政史研究所非常勤研究生。

黛　千羽鶴（まゆずみ　ちはづ）
一九六〇年生まれ。書家。書を岡部蒼風氏・高橋維周氏に、古文書を北沢文武氏に学ぶ。書家として地域での教育活動に従事する。

高柳　紀子（たかやなぎ　のりこ）
一九七一年生まれ。旧姓沢田。大福茶屋店主。幼稚園教員後、ワーキングホリデーで NZ へ。妻沼まちづくり工房。まろく会。

埼北文化研究会とは

埼玉県北部の地域文化の発掘・広報を目的として二〇一九年に設立された団体。地域発掘マガジン『土と水と風』の発行や講演会の運営をおこなっている。これまで「うちわ祭り―鳶の衣装を掘ってみる―」「熊谷市中西の昔を語る」など、地域にこだわった講演会を実施している。

連絡先：saihokubunka5@gmail.com

今につながる妻沼の歴史

2023 年 6 月 15 日　初版第一刷発行
著　者　埼北文化研究会
発行者　山本 智紀
印　刷　日本ワントゥワンソリューションズ（株）
発行所　まつやま書房
〒 355 － 0017　埼玉県東松山市松葉町 3 － 2 － 5
Tel.0493 － 22 － 4162　Fax.0493 － 22 － 4460
郵便振替　00190 － 3 － 70394
URL:http://www.matsuyama-syobou.com/

© SAIHOKUBUNKAKENKYUKAI
ISBN 978-4-89623-200-4 C0021

著者・出版社に無断で、この本の内容を転載・コピー・写真・絵画その他これに準ずるものに利用することは著作権法に違反します。乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
定価はカバー・表紙に印刷してあります。